

## 沖縄・旧石器時代遺跡群の旅

～日本人の起源を求めて～

港川人の郷

いのうえしゅういち  
井上修一

(大阪本町・歴史倶楽部主宰)

我が大阪本町・歴史倶楽部の会是は「日本人はどこから来たか」である。会は発足以来二十二年目を迎えているが、このクラブ・テーマは今もって最重要課題として我々の前に横たわっている。

この真理を求めて我々は、北海道から鹿児島までの日本各地と、韓国、中国、台湾、シルクロードと、様々な遺跡を訪ねて歩き思索を重ねたが、真理の解明には未だほど遠い。

個人的にも、人類の母イブや、原人・旧人・新人の発祥やその展開、日本における旧石器時代、縄文時代などには大いなる興味をかき立てられている。このシリーズでも紹

介した、ドイツのネアンデルタールや、フランスのクロマニヨン、ラスコーの壁画洞窟などにわざわざ出かけて、その痕跡をこの目で見たいという欲求も、その真理に迫りたいという願望の表れである。だが、現地へ赴き、人類の始祖たちの息吹をこの目で見たとしても、人類の途方も無く長い歩みやその営みの全容はあまりにも遠大で宏大であり、これを理解するのは、私には一生不可能では無いのかという気にもなってくる。

しかしながら、最近の人類学関係の学問は格段の進歩を見せ、特にDNAを中心とした人類の(日本人の)起源に迫る研究には目を見張るものがある。ここ数年の、国立遺

伝学研究所（静岡県三島市）の斎藤成也教授らのグループによる縄文人の核DNA解析の結果、現代日本人（東京周辺）は、遺情報約12%を縄文人から受け継いでいることが明らかになった。また縄文人は、きわめて古い時代に他のアジア人集団から分かれ、独自に進化した特異な集団だったことも判明した。縄文人は中国人や韓国人とは違う系統の人類進化の道をたどっているのである。それはまた、「では、縄文人はどこから来たのか？」と言う新たな謎を生み出すことにもなったわけであるが。

これまで九州以北の日本本土では、旧石器時代の遺跡の数は1万件を越えているのに、彼らの人骨は、殆ど発見されていない。確実に旧石器時代と認定されている人骨は、静岡県浜松市から出土した「浜北人」と呼ばれる人骨の頭骨片、四肢骨片のみで、一万七千年前のものとされている。一方沖縄では、多くの旧石器人骨が発見されている。

1960年代から沖縄では人骨が発見されているが、有名なのは1970年（昭和45年）に沖縄県具志頭村（現・八重瀬町）港川で、地元の歴史研究家大山盛保（現・見された「港川人」）である。最終的には4体の男女完全骨格が発見され、約2万年前のものと考えられた。またほぼ同時期（1968～1969）に、那覇市山下町第一洞窟では小児の脚の骨（大腿骨、脛骨）が発見され、同時に発掘さ

れた木片の放射性炭素年代測定の結果、3万6千年前と考えられた。その後も沖縄・琉球列島では旧石器人骨の発見が相次いでおり、最新の話題は、2008年に石垣島東岸の白保地区で発見された「白保竿根田原遺跡」からの人骨である。新石垣島空港建設に伴って発見された人骨数体は、それぞれ、1万9千年～2万4千年前の旧石器人のものと考えられた。

日本本土では殆ど発見されない旧石器人骨が、なぜ沖縄ではかくも多く発見されるのだろうか。それは本土の同時代の土が火山灰を多く含んだ酸性の土壌で、人骨は殆ど溶けてしまう事が理由のようだ。沖縄・琉球列島の土壌は、その多くが珊瑚礁の残骸からなる石灰岩から組成されており、石灰岩には炭酸カルシウムが多く含まれるため、アルカリ分の成分によって人骨は風化から免れ、化石として残存するのである。

平成30年2月に、以前「魏志倭人伝の旅」で洛陽から釜山への旅をした、同じ考古学専門ツアー会社から、「沖縄旧石器文化を訪ねて」という案内が来た。見てみると私の行きたいところをほぼ巡る旅だったので、歴史倶楽部の錦織さんを誘って早速参加した。専門家が同行するツアーで、今回は大阪府弥生文化博物館の学芸員中尾智行氏が同行した。彼とは、我が歴史倶楽部の博物館見学の際特別に



■ 2018年2月21日（水）  
沖縄旅行「沖縄の旧石器文化と南島」

解説をお願いしたり、何かとお世話になっていて顔見知りだったので、道中タメ口で冗談を交わしたり、邪馬台国論では近畿対九州で激論したりと、なかなか面白い旅だった。紀行文は道中記録したものが、ツアーは旧石器時代遺跡以外にも、グスクや首里城なども巡ったので、旧石器遺跡部分以外は割愛した。

AM 2時、AM 5時と二度寝する。6時起床。きつねうどんを作って食べる。

今日から沖縄だ。西表、石垣には行ったが、沖縄本島にはまだ行つたことが無いので楽しみである。7時頃、wifeが起きてきてパンを



ガンガラーの谷入り口、カフェのパラソルが見える

焼いている。NHKの平昌オリンピックを見ながら珈琲を飲む。wifeに送って貰い、9時30分伊丹空港着。集合場所へ行くと、全邪馬連関西支部の小宮山さんがいる。彼も友人と参加していた。機内で食べる弁当を支給される。

やがて今回一緒に行く、同室の錦織さんが来た。錦織さんも大阪本町・歴史倶楽部の会員だ。もう20年ほどの付き合いになる。今回の旅の資料、航空券が支給され、搭乗口へ進む。全部で40名程の参加者だ。どこかの修学旅行生（中学生）と一緒にだった。山梨だか群馬だったか。埼玉だったかもしれない。出発が20分ほど遅れ、機内で弁当を食べている内に、13時50分、那覇空港着陸。暑い。

ジャケットの下に着ていたチョッキを脱ぐ。出口にバスの運転手さんが待っている。14時20分バス乗車。予定では、日本最古の人骨と礫石器が出土した「山下町第一洞窟遺跡」から先に行くはずだったが到着が遅れたため、「ガンガラーの谷（サキタリ洞、武芸洞）」へ先に行く事になる。

ここは予約制なので、指定された時間に行かないと見学できない遺跡なのだ。ここは現在も発掘が継続中で、新しい発見が相次いでいる遺跡である。バスを降りてジャングルのような道を進んでいくと、だんだん下方へ下がって行った所に、大きな鍾乳洞の入り口が見えてきた。鍾乳洞の入り口前は広場になっていて、30〜40人は入れそうなカフェが営業している。広場に椅子、机を置いて観光客を呼んでいるのだ。驚いた。こんな遺跡は初めてだ。我々の駐車場には、中国や韓国からの大型バスが目白押しだったので、このカフェはこれらの客を満足させる施設なのだろう。鍾乳洞を奥へ進んで、縄文や旧石器の遺跡を見学してそうな

人はほとんどいない。

我々考古ツアーの一団は、カフェを無視して鍾乳洞の中へ入ってゆく。鍾乳洞へ入ってすぐの右側も発掘中だった。

沖縄県の職員であり、発掘現場責任者の山崎さんの説明を聞く。発掘中の遺跡には縄文人の痕跡があると言う。さらに10mほど進んだ右手の窪みから、約2万年前、世界最古の釣り針が出土した。同時に、カニや貝類の夥しい遺物、2万年前の人骨、縄文時代人骨などが発見された。ここは「サキタリ洞遺跡」と名付けられている。

この谷全体が巨大な鍾乳洞で、雄樋川に沿って延々と続いている。前述したように、酸性の土壌に広く覆われた本土の旧石器遺跡からは、石器以外の遺物は殆ど出土しないが、このサキタリ洞遺跡では、旧石器人たちが貝殻を加工して石器の代わりに道具（貝器）として用いていたことが判明した。同じく2万年前の地層から、炭化物とともに、モズクガニの爪やカワニナ、カタツムリが大量に出土し、これらは旧石器人たちの食料だったと考えられる。

約1万4年前の地層からは、人骨とともに、石英製の石器が発見された。サキタリ洞周辺には石英は分布しておらず、30km以上離れた沖縄県中北部に分布することから、そのあたりから運ばれてきた物と思われる。同じ地層から、15mほどの巻き貝（マツムシ）に穴を開けてひもを



巻貝（ギンタカハマ）製 最大長 14mm  
左：表面 右：裏面  
（沖縄県立博物館・美術館所蔵）



動物遺体 2万年前  
（「島に生きた旧石器人 沖縄の洞穴遺跡と人骨化石」著：山崎真治 新泉社刊より  
沖縄県立博物館・美術館所蔵）



約2万年前の石器  
（沖縄県立博物館・美術館所蔵）



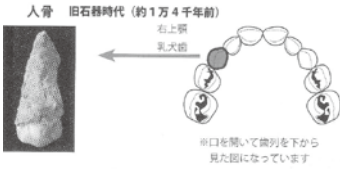
釣り針発見場所

通し、ビーズとして使用された（と思われる）ものも出土したが、土器は発見されていない。しかしこの上部の縄文時代層からは、石器に混じって、縄文時代早期の無紋土器のかけらが出土している。

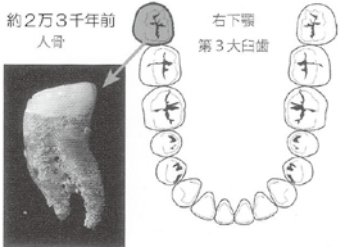
人骨は、1万4千年前も2万年前のものも歯の一部で、それ以外の人骨は出土していないが、サキタリ洞遺跡からは、縄文早期のほぼ全身が揃った約9千年前の人骨が出土しているし、武芸洞遺跡では、縄文晩期（約2500年前）の石棺墓と、そこに埋葬されていた完形の人骨が出土している。また縄文早期の人骨の頭部には、30cmほどの石灰岩の礫が人為的に並べて置かれ、我が国における最初の埋葬人骨である可能性が高い。これらの人骨は、沖縄博物館・美術館で実見できる。

ここに掲示した発掘品の写真並びに資料等は、参考資料の「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘 沖縄県立博物館・美術館」および、「島に生きた旧石器人 沖縄の洞穴遺跡と人骨化石 山崎真治 新泉社」から転載している。深謝したい。

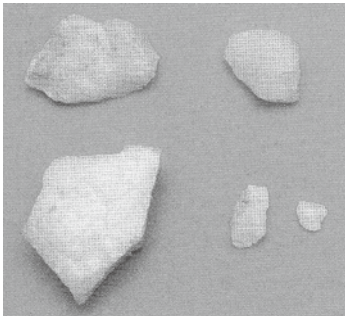
谷全体を、本土とは違う植生の木々たちが覆い、周りの光景も全く本土とは異なる。これが沖縄か、と思う。ジャングルだ。この遺跡は現在も発掘調査中であり、今後も新たな発見が期待されている。鍾乳洞をさらに30分程歩いて林の中を行くと、材木で階段と展望台が作っており、登るとジャングルに囲まれた付近の風景が一望でき、次に行く



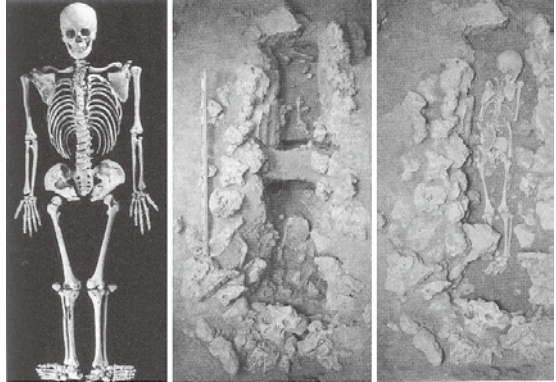
人骨 旧石器時代 (約 1万4千年前)  
(沖縄県立博物館・美術館所蔵)



人骨 約 2万3千年前  
(沖縄県立博物館・美術館所蔵)



石英製石器 旧石器時代  
(約 1万4千年前)  
(沖縄県立博物館・美術館所蔵)



武芸洞遺跡の石棺墓 (右・中) と出土した人骨 (左)  
(沖縄県立博物館・美術館所蔵)



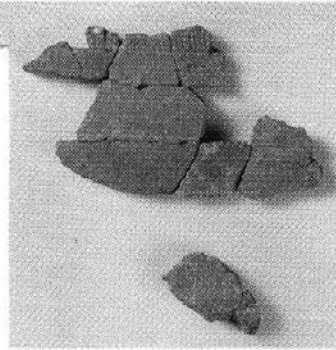
サキタリ洞遺跡の人骨出土状況 (9千年前以前)  
(沖縄県立博物館・美術館所蔵)

**縄文時代以降（約9千年前～）**

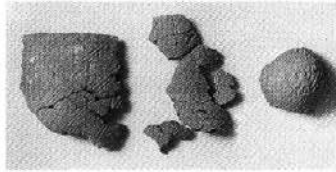
**さかのぼる沖縄先史土器の起源**

サキタリ洞遺跡の調査区Ⅱでは、縄文時代前期（約5千年前）の条痕文土器を多く含む地層より下位から、これまで沖縄では類例のない押引文土器が出土しました。同じ地層に含まれていた炭化物やカタツムリの殻の放射性炭素年代測定の結果、この押引文土器は、それまで沖縄最古の土器と考えられていた約7千年前の南島爪形文土器よりも古い、約9千年前のものであることがわかりました。

押引文土器の発見によって、沖縄先史土器の起源が、従来の想定よりも2千年ほど古くさかのぼることが明らかになりました。押引文土器のルーツはまだよくわかっていませんが、島界島の島界町総合グラウンド遺跡から出土した刺突条線文土器との類似点が認められます。



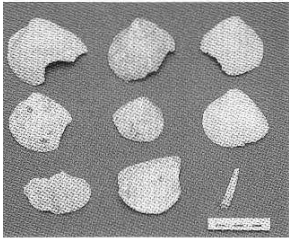
▲ サキタリ洞遺跡出土の押引文土器



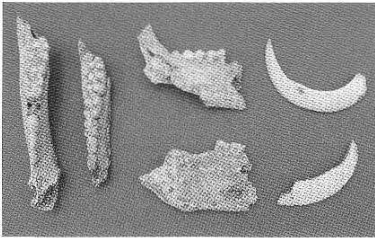
条痕文土器（約5千年前）

（沖縄県立博物館・美術館所蔵）

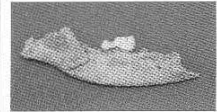
**縄文時代以降（約9千年前～）**



貝類（約5千年前）

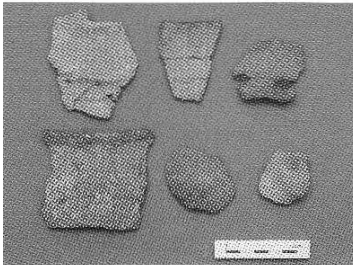


イノシシの下顎骨と犬歯（約5千年前）

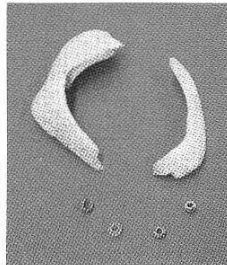


イヌの下顎骨（約5千年前）

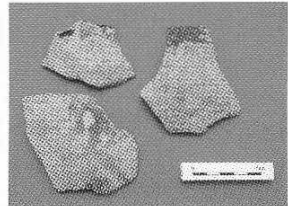
沖縄では約5千5百年前の釜畑式土器の時代以降、イヌが現れます。九州との文化的交流の中で、イヌの飼育が始まったと考えられます。



弥生並行時代の土器（約2千年前）



弥生並行時代の貝輪（上）とガラスビーズ（下）（約2千年前）



グスク時代の土器（11世紀頃）

沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘（沖縄県立博物館・美術館蔵）



この遺跡は、住宅地の中にぽつんとココだけ取り残され

「山下第一洞窟」の林も見えていた。

駐車場手前で、洞窟を案内してくれた山崎さんとスタッフが、このサカタリ遺跡の関連図書を販売していた。前述の山崎さんの著書を買ってサインを貰う。山崎さんとはこの後、沖縄県立博物館・美術館で再会する。山崎さんは、通常は博物館にいるのだった。

バスに乗り込み、30分ほどで「山下第一洞窟遺跡」に到着。ここは日本最古の人骨が発見されたところである。3万2千年前の人骨が出たのだ。





まだアメリカ施政権下の1962(昭和37)年、コザ市(現・沖縄市)の女性がここで神事を行っていた際、多量のシカの化石骨を発見した。その中に人為的な加工を施された骨が数点見つかり、琉球政府文化財保護委員会と沖縄大学によって緊急調査が行われた。第一次調査は琉球政府文化財保護委員会が主体となって1962年12月28日から

で、塞いでおかないと危険なのだろう。その代わり、公園内には遺跡の説明版が結構設置されていた。



たように保存してある遺跡である。周囲は公園になっており、親子連れやカップルがちらほらいる。周りは戸建て住宅とビルばかり。洞窟の入り口となつている所を見ても、もう洞窟は見えない。完全に埋め戻されている。公園には子供たちも多いの

4日間行われ、更新世と考えられる木炭層から3点の石器が出土した。この木炭層は、人間により整地された「生活面」と考えられ、焼土（炉跡）、焼礫集中部（礫群）という遺構が存在していた。

年代は炭素年代法によって、約3万2千年前と測定された。石器は洞穴内に自然に存在していたものでなく、別の場所から持ち込まれたものであり、3点共に自然礫に人為的な打痕、磨耗痕、それに打割調整と整形痕が認められ、石器として使用された人工物であることが確実だった。

1968（昭和43）年、東京大学の「沖縄洪積世人類遺



伊計島仲原縄文遺跡にて錦織さんと



2018 02 22 19:3

跡調査団」によって第二次調査が行われ、この調査で、脛1点、大腿骨1点、腓骨1点の計3点の化石人骨片が出土した。

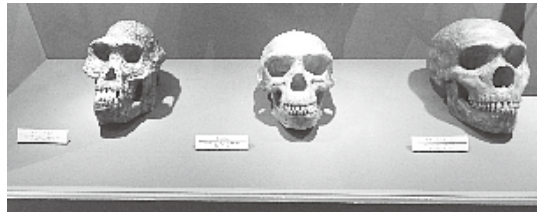
およそ8歳くらいの小児のものであろうと推定された。

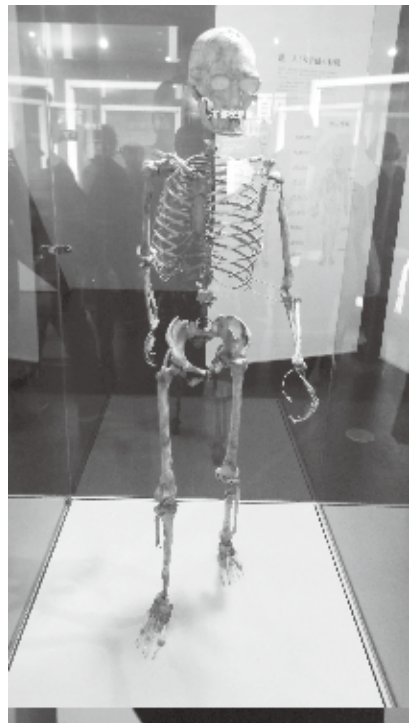
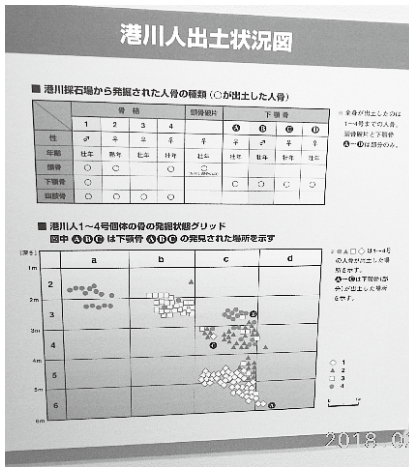
人骨と石器が出土した層は同時期とされ、一躍この遺跡は、旧石器人「山下洞人」の人骨や旧石器が出土した、極めて重要な遺跡となった。

ここから出土した人骨は、現在でも日本最古の旧石器人骨である。

■ 2018年2月22日（木曜日）

本日は、伊計島の縄文遺跡「仲原遺跡」を見て、有名なグスクの「勝連城跡」、「斎場御嶽」（せーふあうたき）、「首里城跡」と廻ったのだが、本稿のテーマである「旧石器時代遺跡」からははずれるので、紀行文は割愛する。ただバsgaidoさんに若いお姉ちゃん加わって、朝から三線の賑やかな響きで、車中が大いに盛り上がった事と、夕食の会場が沖縄で一番だという料亭の「那覇」だった事、料理もさることながら、沖縄民謡のショーもすばらしく、食後、一行全員踊りに参加して、恐ろしく沖縄らしい夜になった事は記しておきたい。





て、ロビーで時ならぬ「邪馬台国論争」となった。交通社  
の辻田社長、添乗解説者の中尾氏、全邪馬連の小宮山氏、

分のホテルへ戻って来  
夕食後歩いて2、3  
るとは思わなかった。  
ちゃん騒ぎを体験でき  
アーで、ああいうどん  
は夕食が凄かった。ツ  
AM5時起床。昨夜

■ 2018年2月  
23日(金曜日)

小生に錦織さん、他にも一、二名いたような。酔っていたのでつい、「だから近畿圏の考古学者はアカンねん。アホばっかしや」と暴言を吐いてしまった。いや暴言では無い。ついつい本音が出てしまったのだ。中尾君などは少しムツとしていた。多勢に無勢、さっさと部屋へ引き上げた。

バイキングの朝食後、8時半頃バスに乗り込む。えらく潇洒なマンションやなと思ったら「那覇商業高等学校」と看板が上がっていた。バスはずっと海沿いの道を走ってゆく。「LINE」と書いた商船が結構多い。豊見城警察署の横を通って、具志頭ぐしかみ（琉球方言・ぐしちゃん）という所に着いた。

「八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館」を見学する。港川人を中心とした考古展示のほか、沖縄戦関係の資料も多く



展示されていた。港川人発見の経緯や、同時に見つかった動物の骨など多彩な展示があった。

資料館を出る頃、雨がパラパラし出した。資料館を出てバスで30分程、サキタリ洞から流れて来た雄樋川に沿って走る。川が河口へ近づいて、道も少し幅広になった場所に、「港川古代人骨出土遺跡」がある。本によっては、「港川フィッシュャー遺跡」とか「港川原人骨出土地」とか書いてあるものもある。

約2万年前の旧石器人である「港川人みなとがしじん」は、フィッシュャーと呼ばれる岩の裂け目から見つかった。肩幅よりも少し広い位の狭い裂け目に、なぜ人骨があったのかはまだわかっていない。狭すぎて居住空間では無いし、狩りの場でも無さそうだ。4体も一緒に見つかった事から考えれば、事故で上から落ちたとも考えにくいし。葬送祭祀儀礼を行っていたのかもされない。或いは崖の上で争って、4人とも上から突き落とされたか、いずれにしてもその真相についての結論は出ていない。男性骨1体、女性骨3体が発見されている。

雑草の生えた空き地の中を進んでゆく。ドン付きは広場のようにになっているが、枯れた雑草とゴミの山である。切り倒した木の切り株や、倒木の幹がそのままになってい

て、「ここが日本最初の旧石器人発見の場所か!」とその荒廃ぶりに驚いてしまった。てっきり綺麗な遺跡公園か何かになっていると想像していたのだ。

後で「沖縄県立博物館・美術館」を訪問したが、巨大なグスクを模したコンクリート作りの壮大な物だった。あんな物を作るのなら、その予算の100分の1で綺麗な遺跡公園ができるのと思ってしまう。中尾君にそう言ったら、「近々整備するらしいですよ」と言っはいたが、どうやら現在まだ私有地で、買取できていないもののように



だ。広場は三方が崖に囲まれていて、正面の崖の上から亀裂が入っているのがわかる。これがフィッシュャーだ。

その後聞いたところでは、港川フィッシュャー遺跡は、発掘調査後も取り壊されることなく、現在も当時の姿がそのまま残されているが、私有地のため普段は施錠してあり立ち入りできないようである。このツアーも事前に所有者の了解を得て見学可能になったものらしい。見学希望者は、八重瀬町立歴史民俗資料館に申し込むとなっている。

冒頭に記したように、この遺跡は1970年頃に地元のアマチュア考古学研究家の大山盛保氏により、具志頭村港川の海岸に近い石切場で発見されたものである。全身が揃った人骨の出現は、旧石器人の形状を知る上での重要な資料になった。この人骨は、石垣島の白保竿根田原洞穴遺

「かつて港川人は縄文人の祖先ではないかと考えられてきたが、2009年の研究で、港川人を縄文人の祖先とする考えに疑問を投げかけるような分析結果が出ている。港

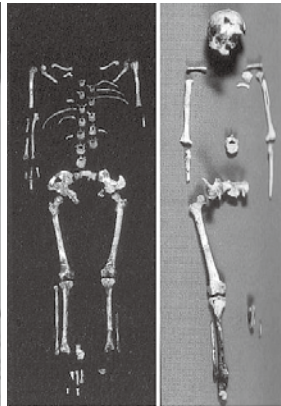
古いものだった。身長は男性で約153～155cm、女性には144cmと小柄で、筋肉質のしつかりとした体型ではあったようだが肩や腕の力は弱く、握力と咀嚼力は強かったことが骨から読み取れるという。発達した下半身の割には、華奢な上半身、比較的細い顎など、本州の縄文人たちとは異なる身体的特徴が認められる。現代人に比べると小柄で、その骨格から、森の中を歩き回りながら狩猟採集生活をしていただろうと推測されている。



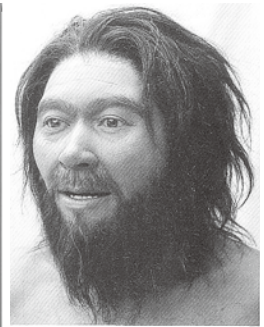
跡で約2万4千年前の人骨が発見されるまで、全身骨格の形で残っている日本の人骨の中で最も



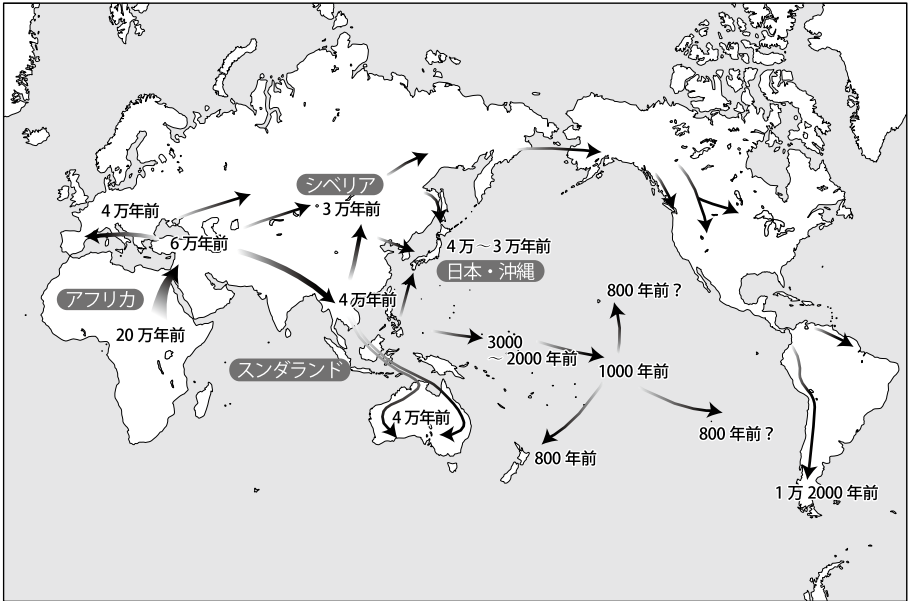
港川人頭部骨（レプリカ）  
（八重瀬町立具志頭歴史民族博物館蔵）



港川人骨  
左から、3号（♀）、4号（♀）。  
これほど保存状態の良い旧石器時代人骨がまとまって発見されることは、世界的に見ても稀である。  
（『島に生きた旧石器人 沖縄の洞穴遺跡と人骨化石』  
著：山崎真治 新泉社刊  
沖縄県立博物館・美術館蔵）



港川人1号の復元  
沖縄県立博物館・美術館の復元模型。  
（『島に生きた旧石器人 沖縄の洞穴遺跡と人骨化石』  
著：山崎真治 新泉社刊  
沖縄県立博物館・美術館蔵）



人類のアフリカからの経路

川人は現在の人類ならば、オーストラリア先住民やニューギニアの集団に近いのではないかとという説である。国立科学博物館の海部陽介研究主幹によると、港川人は本土の縄文人とは異なる集団だった可能性がある。つまり、港川人は5万〜1万年前の東南アジアやオーストラリアに広く分布していた集団から由来したことになる。その後、農耕文化を持った人たちが東南アジアに広がり、港川人のような集団はオーストラリアなどに限定されたのではないかと述べている。(ウィキペディア)

「これまでに出土した化石人骨と縄文人の関係を見ると、縄文人に最も近いとされているのは沖縄島出土の港川人(およそ8千年前)であるが、形質面から見ると縄文人は港川人の次の段階とまでは言えず、両者の間には更に1つ2つのミッシングリンクがあると考えられている。港川人の頭骨はワジャク人に近く、柳江人や山頂洞人(中国)にはそれほど似ていない為、少なくとも琉球弧の縄文人の祖先は環太平洋方面から来たのではないかと考えられている。」(ウィキペディア)

アフリカで約20万年前に現生人類(ホモサピエンス)が誕生して以来、人がヨーロッパ、アジア、シベリア、スランドと、世界中へ拡散していった事は今や定説になっ



ている。

アジアへ向かった一団は南アジアを経由して東アジアにもやってきた。現在、東アジアで最古のホモサピエンス化石は、中国周口店の田園洞やスタンランド（スタンダ陸棚・海面低下期にアジア大陸の一部だった）のボルネオ島・ニア洞窟などで出土しており、約4万年ほど前と考えられている。日本列島（古本州島・琉球列島）へ渡ってきたのもほぼ同時期の、4万年前～3万5千年前頃と考えられており、それは見てきた「山下町第一洞窟」の小児人骨が3万6千年前のものであることから証明される。

古本州島も琉球列島も、当時はアジア大陸からは切り離された島しかなかったと考えられ、人々は何らかの手段で海を渡ってきた事になる。縄文より遙かな昔に、既に外洋を渡る手段を持っていたのである。伊豆諸島の神津島の黒曜石を求めて、本土と神津島を往復していたのも3万5千年前の旧石器時代なのだ。どのような航海術で大海原を渡っていったのか。驚愕せざるを得ない。

ところで、このように多くの旧石器人骨が発見される琉球諸島であるが、考古学上、旧来2つの大きな謎があるとされてきた。一つは、本土の旧石器遺跡に比べて石器が極端に少ない事である。

サキタリ洞、港川、白保竿根田原の遺跡群の中で、発見

された石器はサキタリ洞遺跡の、石英製石器だけなのである。石器の材料となる石材が乏しい事、貝器がその代わりをしていたこと、石器を使わねばならない仕事（例えば大型獣の解体作業など）が少なかったことなどが論じられている。

二つ目は、3万6千年前の「山下町第一遺跡」から2万年前の港川人まで、期間が開きすぎることに。しかしこれは、白保竿根田原遺跡の発見でその間が埋まってきたので、今後謎では無くなっていくものと思われる。

人類の誕生とその拡散については、現在世界中で研究が継続中であるし、DNA分析による追跡も、日々新たな発見を生み出している。冒頭の、縄文人DNAの分析などは、今後どのような展開を見せるのか、まことにもって興味深い。

世界中の学者によって進められている研究の成果が、いつの日が一堂に会して、壮大な人類の歩みがやがて体系化されることだろう。その時点で、果たして日本人がどこから来たのかも明らかになるかもしれない。人類の一大叙事詩を早く見たいものである。

「実は、旧石器時代に人類が生息していた島は、世界中を見わたしてもそう多くは無い。インドネシアの東に浮か

ぶフロレス島は、面積13500平方キロで四国よりやや小さい島だが、80年以上前に原人の仲間（ジャワ原人の仲間だったと考えられている）が到達していたことで有名な島である。フロレス島に到達した原人は、長い年月の間に島に適應し、体型も小型化していた（身長わずか1mほど）ことが知られている。

島での生活には、本土とは異なったさまざまな側面がある。長い間本土から切り離されていたフロレス島や沖繩島では、本土と比べて中大型動物が少なく、陸獣などの動物相が貧弱である。フロレス島のフロレス原人は、水牛ほどの大きさの小型化したゾウ（ビグミーステゴドン）や、体高1.5mもあるハゲコウの仲間を捕食していたようだが、そうした動物たちはやがて絶滅していったようである。沖繩でもかつてはリュウキュウジカやリュウキュウムカシキヨンといったシカの仲間が生息していたが、2万年前頃には絶滅し、中大型の陸獣はイノシシ一種のみになった。

しかも、旧石器時代には、沖繩周辺の海は現在のように温暖ではなく、サンゴ礁も発達していなかったと考えられており、サンゴ礁がもたらす魚や貝といった海の資源を利用することも難しかったようだ。旧石器人にとって、沖繩は非常に苛酷な環境だったに違い無い。しかし、沖繩では、沖繩島、久米島、宮古島、石垣島の各島から、旧石器時代

の骨が発見されている。」

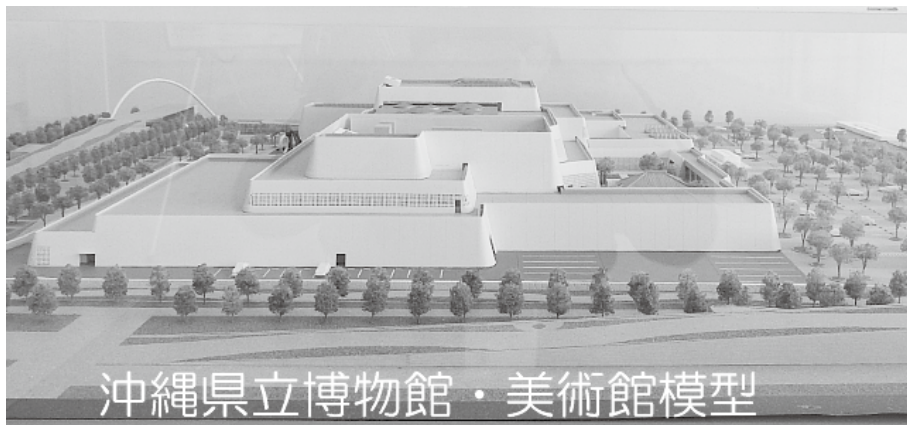
沖繩県立博物館・美術館―島に生きた旧石器人とその文化を探る―サキタリ洞遺跡発掘調査速報展―から転載。

更新日 2014年1月30日

見学が終わって昼食に沖繩そばを食べた。正直私は、ラーメンや日本そば、うどんの方が旨いと思う。昼食後は楽しみにしていた博物館である。グスクを模したと言うそのスケールには驚くばかりだった。本土でもこれだけのものはなかなかあるまいと思うほどの「沖繩県立博物館 美術館」を見学して空港へ向かう。サキタリ洞で解説してくれた山崎さんが、博物館内もまた案内してくれた。山崎さん、お世話になりました。中尾君いろいろ難癖つけてごめんね。また大阪では宜しく。

沖繩県立博物館・美術館に「港川人復元像」が所蔵されている。また、八重瀬町立具志頭歴史民族資料館には、常設展示の一つとして港川人コーナーがあり、全身骨格のレプリカやこれまでの研究成果が紹介されている。平成24年にはこの遺跡を発見した那覇市の実業家、大山盛保氏の生誕100年にあたり、沖繩県立博物館・美術館にて大山氏を称える企画展が開催されたそうである。

博物館は凄い規模だった。グスクを模したという白亜の



## 沖縄県立博物館・美術館模型

建物の中に、沖縄の歴史がぎゅしりと詰まっている。ここへ来れば、沖縄の歴史がその成り立ちから現代まで、一通り概観できる。勿論、港川原人やその他見てきた遺跡からの出土物も含めて、所狭しと展示されている。

沖縄の人々が生きてきた壮大な物語を見ることができた。

しかしながら、考えてみれば、

沖縄に旧石器人たちがどこから到達した頃、私の先祖もどこかにいたのである。そしておそらくは、見たような頭蓋骨や背骨や手足を持ち、鹿の骨か猪の骨かで作った釣り針を作って魚を捕っていた。或いは石器を磨き、木の枝に巻き付けて、オオツノジカに向かって投げたかもしれない。私の祖父の、そのまた祖父の、さらにその曾祖父たちとどんどん遡れば、どこかの旧石器人が私の先祖なのだ。でなければ今の私はいない。私につながる血脈が、もしどこかで途絶えていれば、今の私は存在していないはずである。途絶えること無く配偶者を獲得し、生殖に励んだ結果、子孫を残した。その子孫はまた子孫を残し、縄文時代、弥生時代、奈良時代、平安時代と、しぶとくどこかで生き残り、明治・大正・昭和を経て、私が誕生した。

そう考えると、実は我々のDNAの中には、単細胞やアメーバあたりから始まる生物の血脈が、延々何百万年と生き続けているのに気づく。どこかの魚の時代に、もし大きな魚に食われていけば、文字通り命脈はそこで尽きている。逃げ延びた魚の一部が地上を這い、或いは木々を伝わって空気から酸素を取り込み、やがて陸生動物になった。そして、は虫類や鳥類やほ乳類になり、子孫を残し続けてきたのである。何億年にもなるだろうこの壮大な流れの中で、どこかの一個体が子孫を残さず滅びていけば、その血

脈はいまこの世には存在していない。生命が、忽然とどこからか出現する訳は無いので、私の命は太古から続いているのだ。君や私、いま我々が生きると言うことはそういうことなのだろう。

沖繩の港川で発見された原人（実際は新人だが）は、私の先祖とこの沖繩とともに生きていたかもしれないし、或いは同時代に、中国大陸の南の果てか、チベットのヒマラヤ山麓でヤギを追いかけていたかもしれない。いずれにしても私の先祖は、この白骨となった旧石器人たちと同じ空気を吸い、同じ瞬間を世界のどこかで過ごしていたのは間違いないのだ。

沖繩の青い空と白い雲、澄んだ空気と爽やかな風を、私の遠い遠いじいさん達も楽しんでたのかもしれないな。

平成最後の年、9月30日大阪・吹田にて。

\* 参考文献

- ・「島に生きた旧石器人 沖繩の洞窟遺跡と人骨化石」  
山崎真治著 2015年10月15日 新泉社
- ・「沖繩の旧石器人と南島文化」

平成29年度大阪府立弥生文化博物館夏季特別展図録  
平成29年7月1日

・「沖繩県南城市 サキタリ洞遺跡の発掘」

沖繩県立博物館・美術館

・「沖繩県、沖繩県観光協会、沖繩県立博物館・美術館、

沖繩県各市町村発行パンフレット」

・「Internet百科事典「ウイキペディア」



井上修一（井上筑前）

一九五〇年福岡県生まれ。大阪府吹田市在住。

大阪本町・歴史倶楽部主宰

全国邪馬台国連絡協議会副会長（近畿東海支部長）

著書『邪馬台国大研究』（梓書院）